

平成13年度病虫害発生予報 第3号（6月予報）

平成13年5月30日
青 森 県

【 概 要 】

水 稲：イネミズゾウムシ、イネドロオイムシ、イネカラバエはいずれも発生時期はやや早く、発生量はやや少ないと予想される。
りん ご：各病虫害とも発生時期は平年並、発生量はモニリア病は少ない、キンモンホソガは津軽地域でやや少ない、南部地域でやや多い、その他の病虫害は平年並と予想される。
特産果樹：西洋なしの黒星病の発生量はやや多いと予想される。ぶどうの灰色かび病、おうとうの灰星病の発生量はともに平年並の予想である。
畑 作：小麦の赤かび病、じゃがいもの疫病がやや多いと予想される。
野 菜：にんにくのさび病、葉枯病がやや多いと予想される。

1 予報内容

(1) 水 稲

病虫害名	予 察 内 容			予 報 の 根 拠
	発生地域	発生時期	発 生 量	
イネミズゾウムシ	津軽地域	(成虫 侵期)	やや少ない	6月の気温は平年並か高い見込みである。 前年の発生量は、津軽地域がやや少なく、南部地域は平年並であった。
	南部地域	やや早い	平年並	
イネドロオイムシ	県内全域	(ふ化 最盛期) やや早い	やや少ない	6月の気温は平年並か高い見込みである。 前年の発生量がやや少なく、越冬成虫数もやや少ないと考えられる。
イネカラバエ	県内全域	(産卵 最盛期) やや早い	やや少ない	6月の気温は平年並か高い見込みである。 前年の発生量は常発地を含めやや少なかった。

(2) りんご

病 害 虫 名	予 察 内 容			予 報 の 根 拠
	発生地域	発生時期	発 生 量	
モニリア病 実腐れ	県内全域		少ない	5月の葉腐れ発生量が少なかった。
黒星病	県内全域		平年並	5月は全般的に感染に好適な日が少なく、発生量は平年並であった。 6月の降水量が平年並が多い見込みである。 6月の気温が平年並か高い見込みである。

病 害 虫 名	予 察 内 容			予 報 の 根 拠
	発生地域	発生時期	発 生 量	
斑点落葉病	県内全域	平年並	平年並	前年秋の発生量がやや少なかった。 6月の気温は平年並が高い、降水量は平年並が多い見込みである。
リンゴコカクモンハマキ	県内全域	平年並	平年並	越冬世代の発生量は平年並であった。 5月下旬の発育が平年並であった。 6月の気温が平年並が高い見込みである。
リンゴモンハマキ	南部地域	平年並	平年並	越冬世代の発生量は平年並であった。 5月下旬の発育が平年並であった。 6月の気温が平年並が高い見込みである。
キンモンホソガ	津軽地域	平年並	やや少ない	前年秋の発生量が津軽地域ではやや少なく、南部地域ではやや多かった。 5月下旬の発育が平年並であった。 6月の気温が平年並が高い見込みである。
	南部地域		やや多い	
クワコナカイガラムシ	津軽地域	平年並	平年並	越冬世代の移動初日は平年並であった。 越冬卵量は平年並である。

その他の病害虫

うどんこ病、黒点病、モモシンクイガは平年並に少ない見込みである。

(3) 特産果樹

病 害 虫 名	予 察 内 容			予 報 の 根 拠
	発生地域	発生時期	発 生 量	
(ぶどう) 灰色かび病	県内全域	平年並	平年並	6月の気温が平年並が高い、降水量が平年並が多い見込みである。
(西洋なし) <フミッシュ・ビューティー> 黒星病	南部地域		やや多い	6月の気温が平年並が高い、降水量が平年並が多い見込みである。 5月の発生量が平年よりやや多かった。
(おうとう) 灰星病・実腐れ	県内全域		平年並	6月の気温は平年並が高い、降水量は平年並が多い見込みである。 花腐れの発生量が平年並であった。

(4) 畑作・野菜

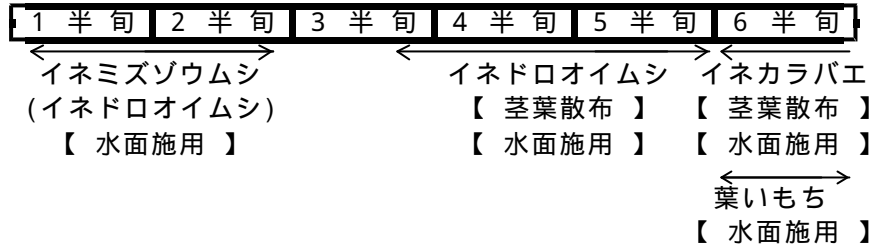
病 害 虫 名	予 察 内 容			予 報 の 根 拠
	発生地域	発生時期	発 生 量	
(小 麦) 赤かび病	県内全域	-	やや多い	出穂期が平年よりやや遅れる見込みである。 6月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多い見込みである。
(小 麦) うどんこ病	県内全域	-	平年並	5月中旬の巡回調査では、発生量は平年よりやや少なかった。 6月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多い見込みである。
(小 麦) 赤さび病	県内全域	-	平年並	5月中旬の巡回調査では、発生量は平年よりやや少なかった。 6月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多い見込みである。
(じゃがいも) 疫病	県内全域	-	やや多い	6月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多い見込みである。
(アブラナ科野菜) ヨトウガ	県内全域	-	やや少ない	5月中旬の巡回調査では発生量は平年より少なかった。 6月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多い見込みである。
(アブラナ科野菜) コナガ	県内全域	-	平年並	5月のフェロモントラップによる誘殺数は平年よりやや多かった。 6月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多い見込みである。
(にんにく) 春腐病	県内全域	-	平年並	5月中旬の巡回調査では発生量は平年よりやや少なかった。 6月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多い見込みである。
(にんにく) さび病	県内全域	-	やや多い	5月中旬の巡回調査では、発生量は平年並であった。 6月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多い見込みである。
(にんにく) 葉枯病	県内全域	-	やや多い	5月中旬の巡回調査では、発生は例年同様認められなかった。 6月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多い見込みである。

注) 6月の気象は5月25日発表の5月26日～6月25日までの1か月予報による

2 防除のポイント

< 水稲 >

《 6 月の防除作業 》



注：←→ は防除時期
 () 内は同時防除できる害虫
 【 】 内は防除方法

【 葉いもち 】

補植用の取置苗は放置すると、葉いもちの発生源になる可能性があるので、補植作業が終わり次第、土中に埋めるなどして処分する。

初発時期が早くなっており、近年 7 月上旬（前年は 6 月 29 日）に初発が確認されているので、発生に注意する。

抵抗性の弱い品種（ゆめあかりなど）や常発地、軟弱な生育をしているところで箱施用や側条施用による予防散布を行っていない場合には初発の前から水面施用による予防散布を行う。水面施用は 10 a 当たり湛水状態で次のいずれかを処理し、4～5 日間水を流さない。6 月末までにはオリゼメート粒剤 3 kg、オリゼメートパック 20 パック、初発の 10 日前～初発時にはオリブライト 1 キロ粒剤 1 kg、オリブライトパック 20 パック散布する。

【 イネミズゾウムシ 】

育苗箱施用などによる防除をしなかった水田では、6 月上旬に越冬成虫の発生状況を調査し、食害株率が 8 割を越えた場合には、県農作物病虫害防除基準に準じて防除する。

越冬成虫の発生状況は、畦畔から水田内に 2～3 m 入って、中央に向かって連続 25 株 2 か所、合計 50 株程度について、成虫による食害がみられる株数を調査して食害株率を算出して判断する。

なお、この時期の防除はイネドロオイムシも同時防除できる。

【 イネドロオイムシ 】

育苗箱施用などにより防除したほ場や 5 月下旬～6 月上旬にイネミズゾウムシを対象とした防除を実施したほ場では、本虫の防除は不要であるが、発生が遅れ 6 月下旬に卵塊や幼虫が多くなるような場合は追加防除が必要になることもあるので、発生状況に注意する。

予防的な防除を実施しなかったほ場では、ふ化最盛期（本田被害発生初期：6 月第 4～5 半旬）に県農作物病虫害防除基準に準じて適期防除を行う。

低温や曇天の日が続くと産卵期間が長引き、防除適期を逸しやすく、また、幼虫の食害活動にも好適となるため、被害が大きくなることがあるので注意する。

【 イネカラバエ 】

防除は、産卵最盛期に PMP 粉剤 3 DL を 10 a 当たり 3～4 kg、またはアッパ水和剤 1000 倍液を 10 a 当たり 80 リットルを茎葉散布するか、産卵最盛期からその 10 日後までにジメトエート粒剤を 10 a 当たり 2 kg 水面施用する。

前年の傷穂の発生が多かったほ場では、ジメトエート粒剤の水面施用により防除する。

茎葉散布による防除では、防除適期である産卵最盛期を逸すると効果が半減するので適期防除に努める。

産卵最盛期を知るためには、産卵状況を実際に調査するのが望ましい。

- ・ 産卵株率が 100%となる地域では、産卵株率が80%に達したら産卵最盛期とみなしても良い。
- ・ 傷穂率 6 %以下の地域では、水稻への初産卵日に 7 ～ 10日を加えた日を、傷穂率 6 %以上の地域では10～ 13日を加えた日を産卵最盛期とみなしても良い。
- ・ 例年の地帯別産卵最盛期の目安は下表のとおりである。

地 帯	産卵最盛期
平野地帯	6 月末～ 7 月始め
山間・海岸地帯	7 月上旬末
下北地域	7 月上旬末～ 中旬始め

越冬幼虫の育つスズメノテッポウ、ヌカボなどの雑草を刈る。

< りんご >

【 腐らん病 】

トップジン M 水和剤 1,500 倍及びベンレート水和剤 3,000 倍は、摘果後の果柄感染の防止効果が高いので、発生が多いところでは 6 月下旬の基準薬剤に必ず加用する。

トップジン M オイルペーストを使用して再発した場合は、削り取って他の塗布剤を塗るか、泥巻きを行う。

【 黒星病 】

6 月下旬に発生が懸念される場合は、この時期の基準薬剤の中からブラウ水和剤又はユニックス水和剤を選択する。

【 斑点落葉病 】

散布量が不足したり散布にむらがあると発生が多くなるので、散布間隔が開きすぎないようにし、基準散布量を守り丁寧に散布する。

【 ハマキムシ類 】

リンゴコカクモンハマキの発生が多いところでは、6 月下旬～ 7 月上旬頃に防除剤（トクチオン水和剤は除く）を加用する。

フェロモントラップによる成虫誘引消長から第 1 世代幼虫の防除時期を推定し防除剤を散布する。

【 キンモンホソガ 】

発生が多いところでは、6 月下旬頃に硫酸ニコチン液剤、デミリン水和剤、アドマイヤー水和剤、モスピラン水溶剤、ピレスロイド剤のいずれかを基準薬剤に加用する。

【 クワコナカイガラムシ 】

落花 15 日後頃に防除剤を散布する。ただし発生が多い樹は落花 10 日後頃と落花 20 日後頃に防除剤で胴木洗いを手散布で行う。

バンド巻きによる誘殺や捕殺などで密度の低下を図る。バンド巻きは越冬世代成虫の産卵前（6 月下旬）に巻きつけ、第 1 世代卵のふ化前（7 月中旬）に必ず除去する。

< 特産果樹 >

ぶどう

【 灰色かび病 】

6 月上旬頃の散布後、不順天候で多発が懸念される場合は、前回散布 1 週間後にオーソサイド水和剤又は本病の同時防除ができるアリエッティ C 水和剤を特別散布し、開花直前にゲッター水和剤又はフルピカフロアブルを選択する。

なし

【 黒星病 】

多発が懸念される場合は、落花 20 日後（6 月上旬頃）の基準薬剤にトップジン M 水和剤又はベンレート水和剤を加用する。

【 輪紋病 】

西洋なしは特に発生が多いので、落花20日後（6月上旬頃）から次の有機殺菌剤を10日おきに散布する。ただし、同じタイプの薬剤の連用はなるべく避ける。

Aタイプ：キャプタン・有機銅剤、キノンドーフロアブル、キャブレート水和剤

Bタイプ：ベフキノン水和剤、ベルコート水和剤

Cタイプ：ストロビードライフロアブル

Dタイプ：デランフロアブル

【 胴枯病（西洋なし） 】

多発生の園地では落花20日後、落花30日後及び7月上旬の散布薬剤にトップジンM水和剤又はベンレート水和剤を加用する。

おうとう

【 灰星病 】

成熟期間中に降雨の続く場合や、花腐れの発生の多かった園地では、収穫7日前頃にラリー水和剤又はルピゲン水和剤を特別散布する。

< 畑作・野菜 >

小 麦

【 赤かび病、うどんこ病、赤さび病 】

赤かび病の発生がやや多くなると予想されるので、出穂期の防除は必ず実施する。開花期～乳熟期にかけて降雨や濃霧が続くような場合には、出穂期散布の7～10日後に追加防除を行う。特に、発生源となる紅色雪腐病の発生が見られたほ場では防除を徹底する。

うどんこ病、赤さび病の発生が多い場合、赤かび病との同時防除を図る。

じゃがいも

【 疫 病 】

平均気温15℃以上で雨が2～3日続くと発生し始め、20℃前後で曇天多湿な天候が続く場合に蔓延する。

着雷期～開花期頃から、7～10日間隔で定期的に防除を実施する。特に、曇雨天の日が続くような場合には、散布間隔が開かないよう降雨の合間をぬって薬剤散布を行う。

発生が認められた場合には、5～7日以内の散布間隔で防除を行い、蔓延を防止する。

【 オオニジュウヤホシテントウ、アブラムシ類 】

いずれの害虫も春からの天気がよい年ほど発生が多くなる傾向がある。

アブラムシ類は、じゃがいもの生育初期にウイルス病を伝搬することがあるので、発生初期からの防除が大切である。

アブラナ科野菜

【 コナガ、ヨトウガ 】

生育初期に発生すると被害が大きいため、定植時の薬剤防除を徹底する。

コナガ及びヨトウガとも、老齢幼虫になると薬剤効果が劣るので、若齢幼虫のうちに防除する。

同時に発生するモンシロチョウ、ウワバ類との同時防除を考慮して効率的な防除を行う。

コナガは殺虫剤に対する抵抗性がつきやすいので、同一系統の薬剤を連用しない。

にんにく

【 春腐病 】

降雨や濃霧が続く場合に急増する特徴があり、多肥栽培及び排水不良田で多発する傾向がある。

多発状態となつてからの薬剤散布では防除効果が上がらないことから、発病株の発見に努め、伝染源となる腐敗株は抜き取る。

発生の多いほ場では、7日おきを目安に抗生物質剤及びその混合剤を散布する。

天気予報により3～4日降雨が続く場合には、降雨前に薬剤を予防散布し、天候の回復後、直ちに再散布して蔓延を防止する。

【 さび病 】

本病は、気温が20 前後と高めに推移すると夏胞子の飛散量が増加し、蔓延しやすくなる。
6 月に入ると大部分のほ場が蔓延期に到達しているので、下記に示した防除薬剤の蔓延期における効果持続期間（散布間隔）を参考にして、防除を実施する。
多発生が予想される場合には、散布間隔を短くする。

《 各種ニンニクさび病防除薬剤の蔓延期における効果持続期間 》

薬 剤 名	効果持続期間
アミスター20フロアブル	21日程度
ラリー乳剤	10～14日程度
ストロビーフロアブル	10日程度
バイレトン乳剤	7～10日程度
バイレトン水和剤 5	7 日程度

【 葉枯病 】

生育の後期に雨が多いと発生が多くなる。
早期発見に努め、発生初期から10日おき位に薬剤を散布する。

6 月の病虫害テレホン情報案内

青森県農業試験場病虫害防除室（津 軽 地 域） 電 話 0 1 7 2 （ 5 3 ） 0 0 3 3

月	旬	水 稻	り ん ご	畑作・野菜
6	上	イネミズゾウムシの防除	黒星病とコナカイガラムシの防除	にんにくの病虫害防除
	中	本田初期害虫の防除	黒星病と斑点落葉病の防除	
	下	イネカラバエの防除	斑点落葉病、ハマキムシ、キンモンホソガの防除	ばれいしょの疫病防除

青森県畑作試験場病虫害防除室（南 部 地 域） 都合により一時休止します。

なお、テレホン情報は、病虫害の発生状況により変更することがあります。

病虫害に関する問合せ先

	電話	F a x
青森県農業試験場病虫害防除室	0172(52)9500	0172(53)3717
青森県畑作園芸試験場病虫害防除室	0176(53)7171	0176(53)8934
青森県りんご試験場病虫肥料部	0172(53)6132	0172(52)5934
青森県りんご試験場県南果樹研究センター	0178(62)4111	0178(62)4114
フラワーセンター21あおもり生産技術部	017(728)8721	017(728)8727